

[島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要 Vol. 48 47~52 (2010)]

多読・多聴による英語力向上を目指して

竹 森 徹 士 小 玉 容 子 ラ ン グ ク リ ス
(総合文化学科)

Toward the Improvement of English Proficiency through Extensive Reading and Listening

Tetsushi TAKEMORI, Yoko KODAMA, Kriss LANGE

キーワード：多読 Extensive Reading 英語教育 English Education

はじめに

島根県立大学短期大学部総合文化学科では英語文化系に所属する学生の英語力向上に向けて様々な取り組みを行っている。その基礎となっているのは、2007年4月の学科再編の際に大幅に改編された新カリキュラムである。その新カリキュラムが目指した英語教育を実施しつつ、なお多様化が進む学生のニーズや学力にどのように対応していくかが英語教員の課題であるが、本稿では、その対策の一つとして2009年度に開始した英語多読・多聴の取り組みを報告する。

1. 現状

2007年の学科再編時に実施された英語科目カリキュラムは、英語実践力の養成と英米文化・文学の理解を柱に据えている。近年の学力の多様化を受け、学生の求めることや学生にとって必要なことも多様化していることへの対応を主眼とし改編を行った。英語実践力という点まず「聞く」、「話す」力を伸ばすことが求められるが、「スピーキング」、「ライティング」のような発信型英語力を養成する授業では、CALL教室でインターネットを使い海外の大学生とチャットや情報交換を行うことで、即時性の高い情報取得や情報発信に力を入れるという新しい試みを行って

いる。また、英語資格取得も目的の一つとしている「資格英語」、「観光英語」などの授業では、TOEICや観光英語検定試験を動機付けとして、基本的な文法の復習、再確認をしたり、語彙を増やすためのドリルをおこなったり、旅行時のシチュエーションを与えることで語彙や表現の定着を促すといった工夫をしている。その他、観光案内を英語で行う機会を設けたり、「キッズイングリッシュ&ストーリーテリング」では手作り紙芝居を英語でプレゼンテーションする機会を設けたりなど、英語を使つての活動を通して英語力の向上を目指す取り組みも行っている。

その他、英米文学やメディア英語などの「読む」授業では、内容理解を主たる目的としつつ、必要な文法事項の説明を加えたり、文脈に沿った読みを指導したりすることで、「読む」力の養成をおこなっている。

2. 問題点

新カリキュラムに基づいた英語教育を受講することで、英語文化系の学生がどれほど英語力を伸ばすことができたかを調べ、問題点があればそれを明らかにするために、英語文化系の学生を中心にTOEIC IPテストを年に2回(6月、12月)実施している。テスト結果を見ると、回を追うごとに総合得点は押

びているものの、リーディングセクションの伸び率がリスニングセクションに比べて低い学生が多いことがわかる。たとえば、2008年度6月実施テストと12月実施テストを比較してみると、リスニングでは1・2年生全体で約28ポイント上昇したがリーディングでは有意差が見られなかった。¹ TOEIC試験に関しては、授業終了後にテスト時間を設定することが多く、学生のテスト当日の疲労度、集中度など考慮すべき要因が他にもあり、TOEICの結果のみで「読む」力を計ることは難しいが、リーディングセクションの得点を上げる鍵は、その問題形式を考えると、基本的な文法知識の習得と「読んで」情報収集をする読解力の向上であると考えられる。

学生の文法知識の不足や、内容を理解しながら英文を読む力の不足に関しては、本学の前身である島根女子短期大学の文学科英文専攻学生を対象にした研究論文でも指摘されているところである。² 現在、文法、読解に関しては、文法、文学、メディア英語の各授業、「資格英語」や「観光英語」の授業などで対応している。しかし、これらの授業で上述の論文が指摘する「英語に触れる絶対量を増やす」ことや「多読や速読をとおして読む量を多くし、「読み」に慣れること」への対応と、文法理解や緻密な読みへの対応の両方を行うことには限界がある。新カリキュラムは多様化する学生のニーズへの対応内容と英語文化系での勉学に当然含まれるべき内容を併せ持つてはいるが、「読む」絶対量を増やすことへの対応に関しては、英語教員が何らかの試みをしていく必要がある。限られた授業時間の中で、個人的な「読む」作業をどう扱うか、またその「読み」をどのように確認していくかなど、検討すべき要素は残るが、読みの絶対量を増やす方法として、近年実践や研究成果が報告されている「多読・多聴」を、課外授業および既存授業の課題として取り入れることで、「読む」絶対量の不足に対応する一つの試みとすることにした。

3. 多読・多聴教育のねらいと位置づけ

ここで我々が念頭に置いている多読・多聴とは、リチャード・R・デイ、ジュリアン・パンフォード、

酒井邦秀らが提唱している指導、あるいは方式にもとづく多読であり、³ その方式をリスニングに対応させたものが多聴である。以下、多読を中心に、英語教育における我々のねらいと位置づけを述べたい。

これらの多読に共通する主な特色は、辞書は引かない、自分の読みたい本を選び、レベルに合わない、あるいは内容がつまらないと思った場合は途中でやめる、といったものである。これは、こまめに辞書を引いて、分からないところは徹底的に調べるといった英語学習の鉄則とはきわめて対照的であり、安易な学習法のように思われるが、そうではない。多読で優先されるのは、まず、訳読をせずに適度な速度で読書を続けること、そして、語学的分析、理解ではなく、内容理解を目的として、楽しみを損なわない読書することである。

そこで重要になるのが、教材である。リチャード・R・デイ、ジュリアン・パンフォードは、読者の言語能力の範囲内で十分理解可能な語彙、文法による教材を用いなければならないとし、⁴ 子供向けの教材や、使用語彙や文法が制限されたGraded Readersを挙げている。また、酒井は、100万語の読破という目標を掲げながらも、ゼロからのスタートとして、一ページに数語の絵本から始めるという思い切った提案を行い、各読者のペースに合わせて少しずつレベルを上げていくことを勧めている。⁵

こうした多読教育での我々のねらいは大きく分けて以下の三点である。

まず、既習の語彙、文法の定着である。多量の英語に触れることで、これまで学んだ語彙や文法知識に繰り返し出会い、様々な文脈のなかでそれらの知識を活用し、身につけることができる。また、無意識的で反射的な理解が可能になり、速読力が養成される。内容、文脈を考えながら読書をするので、文章から語の意味を推測したり、文法を予測しながら読もうとする力を養うことができる。

そして様々なレベルの学生に対応できるということである。あえてきわめてやさしい絵本教材を導入に用いる利点としてまず挙げるべきは、学習者の英語レベルを問わない点である。英語を試験科目の一つと考えている学生にとって、絵本は新鮮な読み物

であろうし、語彙、文法の理解に負担を感じずに読める絵本は、英語に苦手意識を持つ学生にとっても、スムーズに受け入れられる。加えて、酒井が示してみせるように、場面を描いた挿絵を活用した読書は、中途半端な辞書使用による英語、日本語訳の1対1対応理解を改めさせ、はるかに日常語の理解に資することが大きいと言える。また、自主性を重んじる多読では、学生は自分のペースに合わせて、ゆっくりとレベルを上げていくことができる。もっとも、これでは大量の英語を読むには長い道のりが必要ではあるが、できるだけ広く門戸を広げてある点は重要であろう。酒井は、「急がば回れ」の標語を引き、多読学習を螺旋階段にたとえてこう述べている。「『めざせ100万語!』の上り方は螺旋階段を使います。それも普通よりはるかに幅が広く、どんな人でもゆっくり登っていけそうなゆるい傾斜です。何度も回らなければなりません、そのうち確実に高い2階に到達します。もし元気があって体力があるなら駆け上ってもいいでしょう。それぞれのペースで進めばいいのです。」⁷

最後に、持続可能な学習姿勢を作ることである。先に述べたように、学習者は、楽しんで読書をしているかどうか重要であり、楽しい読書の過程で英語の習得がスムーズになることが期待されている。リチャード・R・デイ、ジュリアン・パンフォードが端的に述べているように、「多読アプローチのねらいは、学生に第二言語で読み、しかもそれを楽しんでもらうこと」である。⁸ 学習者は、語学レベルもふくめて、自分が楽しめるレベルと関心に合わせて自主的に本を選んで読む。十分内容が理解できる英語の本を読むことで、英語による読書の楽しみを知り、さらに本を読むことで、英語を読む速さが増し、また次の本に手を伸ばす、という循環から、自主的な読書習慣を身につけることが、大量の英語を読みこなすペースになる。

他の教育機関において英語多読教育を導入した成果についてはさまざまな報告があるが、⁹ 短期大学である本学の2年間の教育において多読を有効的に取り入れるには、他の英語関連科目との連携、あるいは役割分担が必要であると思われる。

多読を試みる最も大きな目的は、文字通り多量の英語のインプットを確保することであり、それによる英語力、とりわけ速読力、読解力の向上を目指している。第二言語習得にはインプットとアウトプットが必要であるとの指摘があるが、¹⁰ アウトプットを中心とした指導は、他の英語関連科目との連携において充実させることとし、私たちの行う多読の当面の目的はインプット増量と位置づけておきたい。

4. 現在の活動

総合文化学科では現在二つの多読活動を行っている。一つはクリス・ラングが実施している2年生の卒業プロジェクト「多読ゼミ」で、もう一つは竹森、ラング、小玉の共同実施による1年生の課外活動としての「多読クラブ」である。それぞれの開始時期、対象学年は異なるが、活動に参加した学生は全員クローズテスト(穴埋めテスト: Cloze Test)を受けている。

使用した100問のクローズテストは、*FVR: Free Voluntary Reading and Fairy/Folk Tale Listening*の著者Beniko Mason が従来より用いているものを、ラングが利用許可を得たものである。クローズテストとは、「学生が辞書を使えばそのテキストを読めるかどうかを調べるテスト」であり、正解率が40%以下の学生は、辞書を用いてもそのテキストを読むことができないと判断し、50%以上だと、辞書を用いてそのテキストが読めるくらいの英語レベルがあると判断する。¹¹

我々がこのテストを用いた理由は、多読活動を1年ないしは半年間継続した後の得点がどの程度伸びるか、またテストのどの語での間違いが正されたか、または正されなかったか、などを分析するためである。

1) 活動の経緯および現状報告

(1) 多読ゼミ

このゼミの活動は、多読による英語力の向上と、英語での読書が楽しくなることを目標としている。ゼミ参加者は、総合文化学科英語文化系と文化資源学系の2年生5名である。参加者はまず2009年4月

前期のスタート時に、Beniko Masonの*FVR: Free Voluntary Reading and Fairy/Folk Tale Listening*を読み、多読についての知識を得た。その後4月15日から多読活動を開始した。10月19日現在までの各学生の読書量は以下の表のとおりである。

表：学生の期間別読書量

学生	4/15 - 7/21 (70日間)		7/22 - 9/30 (51日間)		10/01 - 10/19 (13日間)	
	合計ページ数	1日の平均ページ数	合計ページ数	1日の平均ページ数	合計ページ数	1日の平均ページ数
A	2160	30.86	830	16.27	359	27.62
B	1224	17.49	196	3.84	98	7.54
C	1402	20.03	699	13.71	281	21.62
D	1514	21.63	195	3.82	182	14.00
E	765	10.93	155	3.04	45	3.46

多読開始2ヶ月後、学生が読書に慣れた頃、学生の読書に対する姿勢を知るために以下の項目を尋ねるアンケートを実施した。回答における数字は、5は「とてもそう思う」から1の「まったくそう思わない」までである。

- 本を読むのに抵抗がなくなった 5 4 3 2 1
- 本以外でも(新聞、教科書、問題集など)英語で書かれた文章を読むのに抵抗がなくなった 5 4 3 2 1
- 英語を読むスピードが速くなった気がする 5 4 3 2 1
- 本を読むのが楽しくなった 5 4 3 2 1
- 語彙が増えた気がする 5 4 3 2 1
- リーディングの実力がついた気がする 5 4 3 2 1
- 文法力がついた気がする 5 4 3 2 1

- これからも続けていけそう 5 4 3 2 1
- 他の人にも多読をすすめたい 5 4 3 2 1
- 読書のペース(一日に1時間程度)はちょうどよい 5 4 3 2 1
- 本の難易度はちょうどよい 5 4 3 2 1
- 本の種類が豊富だと思う 5 4 3 2 1
- 本の数は十分だと思う 5 4 3 2 1

その結果、特に高い指数を示したのは、
、
の項目であった。また、自由記述部分では、2か月経ち、「内容が難しくなってきた、読書の時間が足りなくなった」「難しくなってきた、少し抵抗がでてきた」という感想が見られたが、全体として見れば、英語での読書に慣れ、皆前向きに取り組む姿勢が身についたことがうかがえる。

(2) 多読クラブ

活動目的は(1)と同様であるが、参加者は総合文化学科英語文化系と日本語文化系の1年生14名である。参加者には以下の文書を配布し、説明を行った。

「英語多読」とは、英語の勉強方法の一つです。今まであまり馴染みの無かった方法だと思えますが、名前の通り、できる限り多くの英語を読みます。各自が自分のペースで、易しい英語での読書から始めて、段階的にレベルを上げていきます。

総文2年生のラングゼミは、「卒業プロジェクト」で「英語多読」を実施しています。先輩の感想を紹介します。

- * 英語での読書に抵抗がなくなった。
- * 読書が楽しくなった。

目標は、後期の期間中に10万語～30万語の英語

を読むことです（各自のペースを大切にします）。この目標達成が、英語力向上及び、（英語での）読書の楽しみへの道です。

実施方法は、まず最低限の読書時間を確保するため、

日時：毎週 火曜日と木曜日、午後6時から6時45分まで。

場所：図書館で読書します。

課外活動ですので、単位はできません。正規カリキュラムの中の英語関連の授業も受講して、総合的な英語力を向上させてください。加えて、この新しい方法で、読書の楽しみを体験してもらいたいと思っています。『読書記録手帳』を配布します。¹² この手帳には、洋書のリストが載っています。生涯学習の手引きとして非常に役立ちます。

10月8日の第一回目は先のクローズテストをおこなった。「多読クラブ」はOxford Reading TreeのLevel 2からスタートした。2009年11月5日現在までの平均読書語数は15,480語であり、目標達成にはまだ長い道のりがあるが、参加者はほぼ全員毎週2回図書館に集まり、この活動をおこなっている。

5. 今後の課題

まず、今年度実施中の多読の成果について、読書量、英語力の伸び等の面から分析、検討を行い、本学学生の英語レベルの見積り、教材の選択、具体的な実施、運営、他の英語授業との関連を考えながら、次年度に向けて多読学習を継続していく。

現在図書館ある多読用の図書数を考えても、次年度も今年度の課外活動とほぼ同規模で行うのが適当だと思われる。図書については、可能であれば増やしていきたい。少なくとも、現在の活動をもとに、学生の好み、レベルについての情報収集は行う。また、データベースを作成し、学生が手軽に図書情報にアクセスできるような環境整備も考えている。

現在行われている課外活動での実施形態については、学生の進度に合わせて調整していく予定である。多読クラブの活動で学生に示した目標値の30万語と

いう数値は、学生に配布した『読書記録手帳』冒頭所収の「英語多読のすすめ」や、豊田高専教育GPプロジェクト中間報告会での配布資料、「多読・多聴による英語教育改善の全学展開」を参考にしたものであり、おおよその目安であったが、¹³ こうした数値を参考に、2年間での無理のない計画と活動を検討したい。

他の英語授業との関連であるが、読解の科目でGraded Readersの教材を取り上げる、課題として用いる、あるいは、Graded Readersに対応した補助教材を活用するなどして、多読用の教材を生かす可能性はある。

多読と並行して行われる多聴については、教材、機材の準備等、現実的な問題も含めて、導入のタイミングを検討しているところである。

こうした活動の一方で重要なのは、英語学習における多読の教育的効果についての考察である。先述のように、当面は多量のインプット確保の機会として多読を導入し、既習の語彙、文法の定着を中心に読解力の強化を図ることにしているが、多読によって期待される、それ以外の英語学習への効果については、考察の余地がある。加えて、TOEICなどの資格試験との関係、適切な英語力の評価法についての整理も必要である。

以上、多くの課題があるが、今後、本学において適切と思われる多読プログラムを検討し、本学の英語教育を充実させたいと考えている。

注

- リスニングとリーディングがほぼ同程度の伸びを示す年度もあったが、受験者数の変化が大きい年だった。他の要因が関係していることが考えられるので、ほぼ同じ学生が受験している年度を参考にしている。
- 松浦雄二、マユアキ、小玉容子「英語基礎学力テストにおける誤答分析」では、学生の英語習得レベルの格差拡大の状況を、英語検定試験をもとに作成したテストを行い明らかにしている。個々の問題の正答率を示しながら、頻度の高い誤答の主たる原因を分析、考察し、高校までに習得

すべき文法の知識が定着していないことを問題点としている。

小玉容子、マユーあき、松浦雄二「英文読解における誤読要因の分析」では、学生に課した短編小説の和訳を分析し、誤読の要因を文法的な観点から考察する一方、文脈理解も含めて文章を理解するという読み方そのものの習得が必要であることを説いている。

- 3 リチャード・R・デイ、ジュリアン・パンフォード『多読で学ぶ英語』、酒井邦秀『快読100万語!』、あるいはBeniko Mason, *FVR: Free Voluntary Reading and Fairy/Folk Tale Listening*を参照。
- 4 リチャード・R・デイ、ジュリアン・パンフォード 22。
- 5 酒井邦秀『さよなら英文法!』204-5に簡潔な説明がある。
- 6 酒井邦秀『さよなら英文法!』228-44。
- 7 酒井邦秀『快読100万語!』181。
- 8 リチャード・R・デイ、ジュリアン・パンフォード 7。
- 9 例えば、豊田高専の『「多読・多聴研究会」資料』に収録されている実践報告を参照。
- 10 白井恭弘『外国語学習の科学』99-102。
- 11 Mason 50。
- 12 SSS英語多読研究会の『めざせ100万語読書記録手帳』を読書記録手帳として学生に配布した。
- 13 豊田高専(西澤一)「多読・多聴授業による英語教育改善の全学展開」5では、30万語の読書量でTOEICのクラス平均に変化が見られ、100万語でTOEICの個人得点に変化が見られると報告されている。

参考文献

小玉容子, マユーあき, 松浦雄二. 「英文読解における誤読要因の分析」 『島根女子短期大学紀要』第44号 (2006) : 31-48.

酒井邦秀. 『快読100万語! ペーパーバックへの道』ちくま学芸文庫 筑摩書房, 2002.

---. 『さよなら英文法! 多読が育てる英語力』ちくま学芸文庫 筑摩書房, 2008.

---. 『どうして英語が使えない? 「学校英語」につける薬』ちくま学芸文庫 筑摩書房, 1996.

白井恭弘. 『外国語学習の科学 第二言語習得理論とは何か』岩波書店, 2008.

白畑知彦(編著), 若林茂則, 須田孝司(著). 『英語習得の「常識」「非常識」 第二言語習得研究からの検証』大修館, 2004.

デイ, リチャード・R, ジュリアン・パンフォード. 『多読で学ぶ英語: 楽しいリーディングへの招待』松柏社, 2006.

豊田高専. 『「多読・多聴研究会」資料: H20年教育GP選定「多読・多聴授業による英語教育改善の全学展開」』2009.

豊田高専(西澤一). 「多読・多聴授業による英語教育改善の全学展開」豊田高専教育GPプロジェクト中間報告会配布資料 2009.

松浦雄二, マユーあき, 小玉容子. 「英語基礎学力テストにおける誤答分析」 『島根女子短期大学紀要』第43号 (2005) : 11-20.

松村昌紀. 『英語教育を知る58の鍵』大修館, 2009.

Mason, Beniko. "Free Voluntary Reading and Autonomy in Second Language Acquisition: Improving TOEFL Scores from Reading Alone." *The International Journal of Foreign Language Teaching* 2.1 (2006): 2-5. October 22, 2007 < <http://www.tprstories.com/ijflt/IJFLTWinter06.pdf>>.

---. *FVR: Free Voluntary Reading and Fairy/Folk Tale Listening*. Seizansha, 2006.

Oller, J. *Language Tests at School: A Pragmatic Approach*. London: Longman, 1979.

(平成21年12月3日受理)